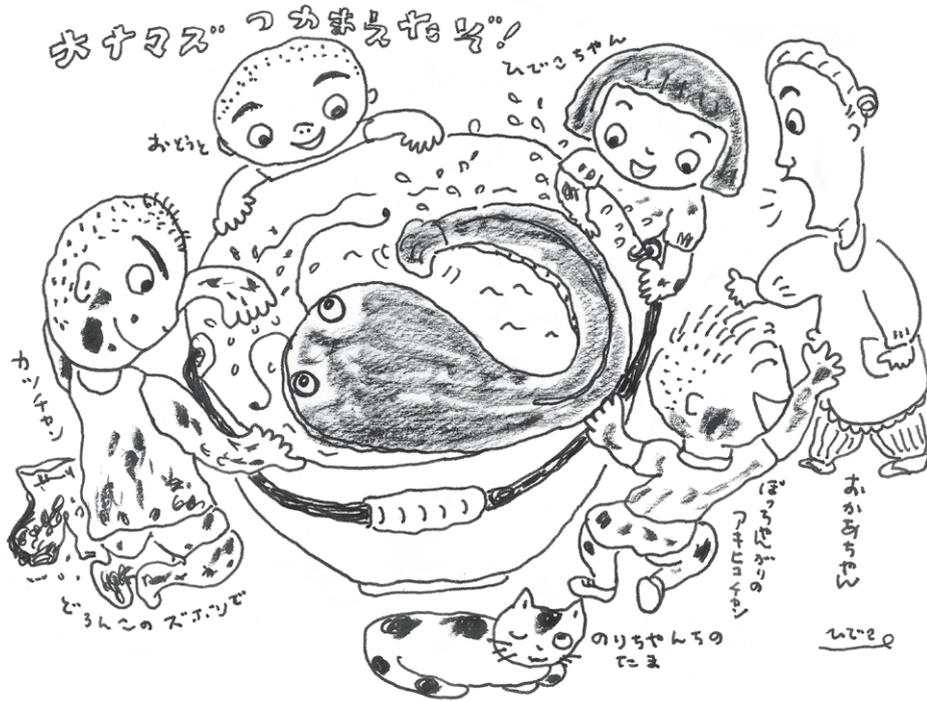


わたしの原風景

19 長野ヒデ子

ながのひでこ 絵本作家



八十年前、後に今治市となる富田村拝志で私は生まれた。村には二つの大きな川に挟まれた実に美しい小川があった。子ども達は、小川の名前は誰も知らずに、小学校の裏を流れていたのを「学校の川」と言ったり、下流の町内では「角米屋の裏の川」と呼んだりした。小川は村を潤し、織田が浜の白砂を作り、瀬戸内の海につながった。体育も運動会も全員裸足だったのでこの小川で足を洗い、雑巾がけの水も絵具や習字の筆に使う水もこの川で汲んだ。フナやハヤやメダカなどを追いかけて、夏には蛍がたくさん飛んだ。

学校帰りはこの小川に沿った道を歩いて帰る。田植えの時期になると、この小川から田んぼに水を引くので浅瀬になる場所ができる。くねっと曲がったところでよく魚を追いかけて道草をした。ある日、かっちゃんとききひこちゃんと私は、脱脂粉乳を飲むアルミのボールで川の水をすくって、魚を捕まえていた。すると大ナマスがよるり。「きゃああー、でたー！」かっちゃんが捕まえたナマスを、脱いだスポンに包んで走った。一番近い我が家に走りこんでブリキのバケツに入れた。バケツの中で曲がるほどの大ナマス！ 魚とりの名人のかっちゃんは「ヒデ子ちゃんにやるよ」というのだ。私と弟は大ナマスを眺めて嬉しくて興奮してその日は眠れなかった。ところが翌朝ナマスは猫にお腹をかじられ死んで浮いていた。私と弟はワーワー泣いた。しかし、なんと母はその大ナマスを網で焼いて「さあ、ナマスはお腹で生きるからね」という。私と弟は泣きながらナマスを食べたのだ。悲しくて学校も休んだ。

同じ村の出身で、無教会派クリスチャンで元東大総長の矢内原忠雄はとてもこの小川を愛し、「拝志川」という母を思う詩を書かれている。それを通して、初めてこの小川の名前を知った。

今、拝志川は見る影もなくコンクリートのドブ川となり、美しい織田が浜は埋め立てられてしまった。だが大ナマスは私の体の中で今も生きていて、拝志川に帰りたいと怒っているのだ。